
恋人は雑霊（生霊）様

那智クロエ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

恋人は雑霊（生霊）様

【Nコード】

N7078M

【作者名】

那智クロエ

【あらすじ】

思いは届いた、意外な形で。「歪んだ」形の愛として。主人公アゲハはオレ様な「彼」に振り回されながら、アンティーク雑貨の店を営んでいる。「彼」であるミイ様は、アゲハにとっては王子様でも、関わる人々にとっては雑^{ざつ}霊^{れい}で、トラブル続出・・・！

intro 彼女と人形様

彼女を魔女のように思う人がいる。

彼女自身はそれを知っていて忌々しく思っているのだが、それには出さないようにしている。

なぜなら彼女は店主であるからだ。

お客様無しで生業は成り立たない。

彼女の店は、雑貨ショップである。

彼女自身が集めた西洋アンティーク、花やレースをあしらった雑貨、手作りの布クラフト、そして

彼女が手作りしたカントリードール。

大正期の古い洋館を手作業で改装した店内に、

珍奇なものやおどろおどろしいアイテムは一切無い。

却って、甘い花の香りや、草原の風が薫るような、

ノスタルジックな雰囲気になりこまれている。

彼女の作る人形は素朴なものだ。

シーチングという種類の織りの粗めな木綿の布を、紅茶で染め、肌色を作り、

人形のボディを作る。

ボディはすべて手縫いで、綿を詰める。

髪の毛は、毛糸やドールヘアと呼ばれる専用の髪を、グルーガンと呼ばれる樹脂を溶かして接着する道具で留めて形作り、

顔はアクリル絵の具で描き、表情を作りボディを完成させる。

そこへ様々な柄やデザインの洋服を着せ、アンティークや雑貨の道具を持たせて、

その人形のキャラクターを作る、というものだ。

どれ一つとして同じには仕上がらない。

世界で一つ、と言っても過言ではない。

実際に世界に一つ、なのだ。

それは、手に取り、彼女の人形を連れて帰った、つまりオーナーになった客が

いつ、誰彼となく、噂するようになった。

「彼女の作る人形は幸せを運んでくれる」

「彼女の作る人形は生きている（かのようだ）」

全く、彼女はそれを忌々しいことだと感じているにも関わらず・・・。

窓から差し込む朝の陽光に少し顔をしかめながら、店内の開店準備を済ませた彼女は、中庭に面する小さなドアに手をかけた。

「オイ、オレ様を置いていくなヨー！」

彼女はくるりと踵を返し、レジ横に設置したノートパソコンの横に手を伸ばした。

ふわりと持ち上げたそれは、緑色の服を着た赤毛の少年の人形。

エプロンの胸元に、その人形を差し込んだ。

フリルの縁から赤毛のモジャモジャ頭と目の一部が見えている。

「オイ！生身だったら骨折しちまうぜ！」

彼女は胸元に目をやり、人形をそつとなでた。

「うん、ゴメンねー！」

「マツタク、雑いんだからヨー！」

彼女はニコつと微笑み、繰り返す。

「うんうん、ゴメンね、ミー様。」

ガーデニングブーツに履き替え、庭の花や草木に水を撒く彼女。

初夏の勢いのある緑に囲まれ、

小さな虹を作りながら水やりをするフリルのエプロンの女性は絵に

なるのだが、

胸元にのぞく人形だけが限りなく違和感を醸し出していた。

「ゼツタイ濡らすなよ!」

「うん、気をつけるから」

傍目に見ると、彼女がずっと人形相手に独り言を言っているように聞こえるだろう。

それはとても痛々しい光景で、正面切って彼女に指摘する勇気が出ない程の痛々しさだった。

きつと何か事情があるに違いない、と察した気持ちになり、そっとしておこう、となるわけである。

そう、確かに事情があった。

彼（人形）と彼女、そして取り巻く幾人かの人々の間には・・・。

ヒキヨセ

「毎度」

宅配便が届いた。

アゲハは縫い物をしていた手を止め振り向いた。

「おいくらですか？」

代金引換の支払いを済ませ、商品を受け取ると、窓際にある小さな木のテーブルの上に置かれたティーポットを持ち上げ

「お茶でもいかがですか？」と、宅配業者に尋ねた。

「今日はどんなお茶ですか？」

宅配業者はテーブルの椅子に座った。

「今日はハーブティーですよ。こんな暑い日にはさっぱりした味のものがいいでしょ？」

「今日はコレ、どうぞ。」

宅配便業者は小さな紙包みをアゲハに渡した。

「あ、ありがとうございます。」

アゲハはすぐ紙包みを開いた。

中にはチョココロネが二つ入っている。

「新しくオープンしたパン屋さんのものでね、つい買っちゃいましたよ。」

「ありがとうございます。わー」美味しそうですね。」

「オレ様があの店教えてやったんだ・ゼ！」

二人はレジ横の小さな椅子に座る人形に呆れ顔で視線を向けた。

「ミー様、お礼くらい言いなさいよ！」

「・・・礼ダケハ言つとくぜ。」

「はぁ・・・やっぱり誘導されたんですね。」

「オレ様腹減ってんだぜ。今日は大物が来るからな。」

「大物？」

アゲハと宅配業者は同時に尋ねた。

「それより早く食わせるヨ！」

アゲハは人形をそつと両手で抱き上げると宅配業者と同じテーブルに着き、膝の上に座らせた。

お茶を宅配業者にサーブしてから、自分のティーカップにも注いだ。それから、人形にそつと花柄のハンカチをかけると、パンを小さく手でちぎって、人形の口に運んだ。

一呼吸置くと、アゲハはそのパンを自分の口に運んだ。

アゲハはテーブルのお茶はさて置き、せつせと人形の口元に小さくちぎったパンを運んで後、自分の口に入れる動作を繰り返している。「うーん。あつさりしたクリームだなあ。」

宅配業者は首をかしげながら

「こういうパンってもつと甘くて苦手なはずなんだけど・・・。」

「・・・すみません、いつもだけど。」

アゲハはペコリと頭を下げ、首をすくめた。

「そちらのパンもミー様が食しているかと・・・。」

「オレ様今日はたくさんエネルギーがいるんだぜ！このパン気に入ったぜ！また買って来いよナ！」

「あ、甘っ！やつと甘くなりましたよ。」

「ミー様・・・大物って一体・・・。」

「まあ、そのうち来るぜ！」

二人は顔を見合わせた。

このやり取りをハタから見ると、微動だにしない無言の人形にパンをふるまい、二人だけの話し声が聞こえる状態である。

『ミー様』の声はどうやら二人だけにしか聞こえないらしい。

『ミー様』はクリクリとカールし、もこもこした毛糸で出来た赤毛の男の子人形で、

身長約25センチの3、5頭身。

目はアゲハがアクリル絵の具のアイボリーと鳶色で手書きした、大きくつぶらな瞳。

ボディは淡いベージュの布で、服は上下が濃い緑色のピーターパン風。

こげ茶のトンがり靴を履いている。

首にはこげ茶色のスカーフを巻いている。

アゲハはパンを3分の2ほど膝の上のミー様に食べさせると、残り3分の1ををハーブティーと共に完食した。

窓の外で車の近づく音がすると、アゲハは席を立ち、膝の上のミー様を抱き上げ、レジ横の椅子にそっと座らせた。

大物

二人は何事も無いかのようにテーブルに着き、ハーブティーを飲む。ティーカップはイギリスのチンツと呼ばれる小花柄のパターン。

黒地にピンクの小さなバラがたくさん描かれたそれは、100年経過していないので、まだアンティークとは言えないが、充分に古びた質感を醸している。

（イギリスでは100年経てアンティークと呼ばれる。生産後100年経つと値段が跳ね上がる。）

ティーポットは透明の耐熱ガラスで、中には様々な葉や花が入っていて、ポットに残っている淡いグリーンの水色が美しい。

窓から射した陽光がポットに透過し、白いリネンのテーブルクロスに淡いグリーンの光を散らしている。

ドアが開き、カランとドアベルの音が鳴った。

フワリ、と清涼感のあるシャボンの香りとともに、端正な顔立ちで線の細い青年が入ってきた。

色は白く面長で、アーモンドアイ。

服装は、白の開襟シャツに緩く締めた細身のネクタイ・・・サラリーマンのネクタイではなく、黒×白の市松模様で、シルバーのデイベアの付いたタイピンがアクセントになっている。

下は七分の丈の黒のパンツで、ユニセックスな雰囲気である。

「いらつしやいませ。」

アゲハは立ち上がり、一礼した。そして、テーブルにティーカップを置き、傍らのソファから作業しかけの布を手に取り、針を持った。今作っているのは、ドールの服、ピンクの小花柄のワンピースだった。

裾に手縫いでレースを縫いつけていく。

手元を見ながらも、アゲハは彼を観察する。
宅配業者は急いで平らげたチョココロネのクリームが付いた手を、
慣れた様子で傍らのティッシュで拭い、お茶の続きを愉しむ。
ゆったりした態度で窓の外を見ている。

アゲハの店の品揃えから、何を求めて来たのか、ただ覗きに来たのか、一見わからない。

彼は店内の商品を手にとった。

オールドノリタケの金彩のティーカップ。

アゲハがイギリスから買い付けしたものである。

普通のシヨップならガラスのショーケースに鍵を掛けた状態で置いているのだが、アゲハは敢えてしない。

躊躇なくアンティークでもジャンクでも使う主義なのだ。

特に高価なアイテムで、仕舞ってあるモノは、ある。

しばらく店内を廻った彼は

「あの・・・」

と、アゲハにおずおずと話しかけた。

「ドールを手作りしてくれるって聞いたんですが。」

キター

アゲハの心のおののき。これは彼には伝わっていない。

宅配業者も悠々とハーブティーを飲みながら、アゲハと同時に心のリアクションを起こしたのはアゲハは承知である。

「こちらへお掛けください。お伺いします。」

アゲハはもう一組あるテーブルへ彼を誘い、ゴールドのデコラティブなティーカップに注いだハーブティーを運んだ。

「お口に合うかわかりませんが、良かったらどうぞ。ハーブティーです。」

彼はじつとカップに見入っている。

「どんなドールですか？イメージをお伺いします。」

アゲハは切り出した。

彼はゆつくりティーカップを手に取り、香りを嗅いだ。

「すつとする香りですね。僕こんなの好きです。」

アゲハはせかすことなく、自分のティーカップもテーブルへ運んで席に着いた。

オオモノダ・ゼ。

ミー様がそつと呟いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7078m/>

恋人は雑霊（生霊）様

2011年10月6日21時38分発行